

## 資料が伝える戦争

戦後七〇年を機会に横浜市史料室では、四月から夏にかけて、戦争に関するミニ展示および展示会「戦争を知る、伝える」を開催した。市民の関心も高く、大勢の方にご覧いただいた。とくに夏休み中は、親子連れの観覧者が目立った。

展示の内容に関しては、空襲の体験記と、今回が初公開であった体験者自身が描いたスケッチや絵が印象深かったという声が多かった。体験記や絵は、体験者のみが伝えられる証言である。記憶の継承として、今後も永く伝えられるべきであろう。

### 日中戦争から太平洋戦争

一方、公的記録をはじめとする様々な資料は、事実を客観的に検証する際には欠かせない。今回の展示では、記録・資料から戦争を考えると、十分に資料を生かし切れなかった面があった。その要因としては、市民と戦争との関わりが非常に多岐にわたるテーマをはらんでいたこと、そして昭和の歴史における戦争の位置づけが未だに明確でないことがあげられるだろう。たとえば、戦争といえは太平洋戦争あるいは第二次世界大戦における対英米戦を思い浮かべ、日中戦争に関する認識が抜け落ちがちという現状がある。また、戦争の呼称も定着していない。満州事変から太平洋戦争を一体として

とらえる呼称として、かつて「一五年戦争」が提唱され、最近では「アジア太平洋戦争」という呼称が多く使われるようになってきた。しかし、日中戦争の意味が見逃されがちという現状はあまり変わっていない。

戦時体制、具体的には国家総動員法（一九三八年制定）に基づく体制は、まだ太平洋戦争が始まる前、一九三七（昭和一二）年七月に始まった日中戦争のなかで形づくられたものであった。このような

日中戦争の意味について、市民が残した資料から改めて考えてみたい。まず、『横浜の空襲と戦災関連資料』から、集した「空襲と戦災関連資料」から、いくつか紹介する。

最初に、当時の日中関係を象徴する資料を紹介しよう。その一つは、一九三七年三月付の郵便料金変更のお知らせ（橋田留雄氏提供）である。郵便局などに掲示されたものと思われる。内容は、葉書が一銭五厘から二銭に、封書が三銭から四銭になったというもので、一見戦争とは何の関係もなさそうである。注目すべきは、外国郵便料金の変更に関する記述である。「満州国及び中華民國宛の通常郵便料金は内国郵便と同じです」とされている。日中戦争開戦前であるが、当時の日本が満州や中国をどのように位置づけてい



北支鉄道スタンプ集 1938（昭和13）年10月10日  
横浜の空襲と戦災関連資料（齊藤秀夫氏提供）

たかが象徴されているといえよう。

もう一つ興味深い資料がある。「北支鉄道スタンプ集」と題したパンフレットで、日中戦争開戦後日本が占領した中国北部の鉄道の駅のスタンプと共に、駅所在地の概観を紹介したものである。一九三八年一〇月一〇日、満鉄北支事務局弘報課発行となっている。北支鉄道とは、北京を起点に内モンゴルまでの京包線や武漢までの京漢線などを指しており、日本の占領下では満鉄傘下の華北交通株式会社が運営した。スタンプ集の冒頭には、「北支一帯は漸次治安の維持、交通の回復を見、各種スタンプが示すが如く政治・経済・産業・文化・観光上に輝かしい前途を約束されつつある」という文言があり、日中戦争開戦一周年を期しての企画であることがうかがえる。二つの資料は、日中戦争開戦前と開

戦後と時期は異なるが、満州および中国北部を勢力圏ととらえる日本側の認識を表している。しかも、これらの資料が一般市民向けの掲示やパンフレットであることは、国民もこうした認識を受け入れていたということを示している。

太平洋戦争が始まるまで、戦地といえは中国大陸であった。太平洋戦争開戦まで四年半に渡って中国との全面戦争は続いており、その後三年半をあわせると、八年に及ぶ戦争が中国大陸で続くことになる。そして、その間横浜からも多くの兵士が、満州や中国に出征していった。その結果、中国大陸に関わる資料が横浜にも残されたのである。

### 甲府連隊と横浜の兵士たち

横浜出身兵士の多くは、甲府連隊に入営した。また、徴兵は本籍を基に行われたため、地方出身の横浜在住者は、出身地の部隊に入営した。もちろん、その他海軍や近衛・騎兵・航空などの部隊に入った兵士も少なくない。さらに、戦況がひっ迫してくると、出身地はあまり関係なく部隊に配属されるようになっていった。

ここでは、横浜出身者が入隊した部隊の代表として、甲府連隊の動きを確認しておこう。日露戦争後一九〇九（明治四二）年以来駐屯地を甲府に定めた第四九連隊は、一九三六（昭和一一）年に満州に派遣された。同連隊は一九

四四年に南方に移動し、グアム島・レイテ島などで全滅に近い被害を出した。この間甲府で新たに編成された連隊の内、第一四九連隊は上海方面に派遣、第二一〇連隊・第二二〇連隊は中国北部から南方に転進する途中、輸送船が攻撃を受けて沈没し、多大な犠牲を出している。このように、戦争末期に中国大陸から南方に移った部隊も多い。

横浜市史資料室所蔵資料から、横浜出身あるいは横浜市民の兵士の記録を見てみよう。空襲と戦災関連資料中には、三冊の軍隊手牒がある。これを手がかりに、兵士の略歴を紹介する。

福岡県出身の宮原忍さん（金沢区）は、一九〇二（明治三五）年生まれ、一九二五（大正一四）年に歩兵第五六連隊（福岡）に入隊、その後歩兵第四八連隊（久留米）に移り、翌年三月三十一日に現役を満期除隊している。その後、一九二七（昭和二）年一二月に勤務演習に応召、翌年四月一日に召集解除された。衛生兵だったようで、一等看護長で兵役を終えている。軍隊手牒の他に、医療品とそれを納める鞆が寄贈されている。軍歴を見る限り、直接戦地には行っていないと思われる。

一方、宮原さんより年長で一八九七（明治三〇）年生まれの小野浩雄さん（神奈川区）は、現役入営し、後に下士官となって戦地にも出征している。静岡県出身の小野さんは一九一七（大正六）年、徴兵検査を受けて現役で輜重兵第一大隊（豊橋）に入隊した。

翌年五月に帰休除隊の後、一九二〇年四月に予備役に編入されている。同年七月には、一ヶ月足らずの予備役勤務召集を受けて下士適任証書を受けた。その後一九二五年に五年の予備役を終え後備役となった。この前後、三回の簡閲点呼の記録がある。

日中戦争開戦直後の一九三七（昭和一二）年八月、四〇歳で充員召集され、輜重兵第三連隊（名古屋）に配属された。同連隊が属する第三師団は、八月上海に最初に派遣された部隊の一つで、翌年中支派遣軍に編成された。小野さんは、中支派遣残留部隊に配属され、隊付教育係となった。輜重兵として馬匹調査を任務としていたというから、最前線には出なかつたかもしれない。



千人針の胴巻 横浜の空襲と戦災関連資料（小野浩雄氏提供）

一九三八年九月伍長に任ぜられた後、十一月に現地召集解除となった。

日中戦争では、小野さんのように予備役・後備役、さらには補充兵役の兵士が多く召集されたといわれる。北支派遣軍・中支派遣軍、そして後には南支那方面軍と、次々と中国に派遣する軍が増強され、戦病死者の増加にしたがって多くの兵員補充が必要とされたからである。小野さんの場合、現役・予備役に次ぐ後備役で、年齢も四〇歳と兵士としては高齢であったにも関わらず、日中戦争開戦間もなく召集されている。日中戦争がいかに国民に負担を強いたかが、うかがえる。

小野さんから寄贈された資料には、軍隊手牒の他出征の際に送られたと思われる日の丸や「第三師団第三連隊後備兵小野浩雄」と記された千人針の胴巻など出征に関わる資料がある。さらに、出征前には防護団員、そして帰還後には在郷軍人会分会役員として、地元神奈川県で活動していた頃の委嘱状や表彰状、防空演習感謝状などの資料が含まれる。地元の町内会・隣組の写真も残されており、兵役と地元町内での活動が在郷軍人会を通してつながっていた様子がよくわかる。

### 徴兵検査と簡閲点呼

一方、軍隊手牒は残されていないが、兵役に関わる貴重な資料を寄贈していただいたのは吉沢吉春さん（旭区）である。なかでも珍しいのは徴兵順序票で、これは徴兵検査合格者の内、定められた人数の現役入営者と補充兵役を決めるためのくじに当たる。

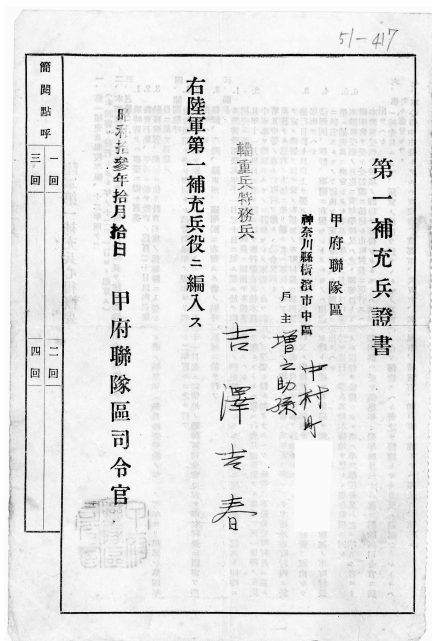
吉沢さんは一九三八年に徴兵検査を受け、第二乙種合格で輜重兵特務兵として第一補充兵に割り振られた。甲府連隊区司令官からの、同年一〇月一日付証書が残されている。輜重兵特務兵とは、戦闘よりも輸送に関わる労務に従事する兵種である。

徴兵検査後の軍歴については、吉沢さん自身が体験記に記している（『横浜の空襲と戦災』2市民生活編、横浜市、一九七五年）。第二乙種合格だったので、「まあ大丈夫」、つまり「召集はこない」と思っていたら、同年九月に教育召集、一ヶ月で召集解除、翌一九三九年九月に臨時召集で上海に出征した。

翌年一月二九日に召集解除、この間上海にいて前線には出なかつたようだ。その頃の上海では、岡春夫の歌う「上



徴兵順序票  
1938（昭和13）年  
横浜の空襲と戦災関連資料  
（吉沢吉春氏提供）



第1補充兵証書 1938 (昭和13)年10月10日  
横浜の空襲と戦災関連資料 (吉沢吉春氏提供)

区)の場合、入営・入隊もしなかったが地元で国民兵として備えていた。

高山さんは一九一一(明治四四)年三重県の生まれで、軍隊手牒には一九四二(昭和一七)年・四三年の簡閲点呼済の記録

海の花売り娘」が流行り、映画「土と兵隊」が上映されていて見に行つた。上海には大きな日本人街があり、映画館などもあったが、時折テロがあつて死傷者が出たという。また、「上海の民衆の生活は悲惨その物」だつたと記している。

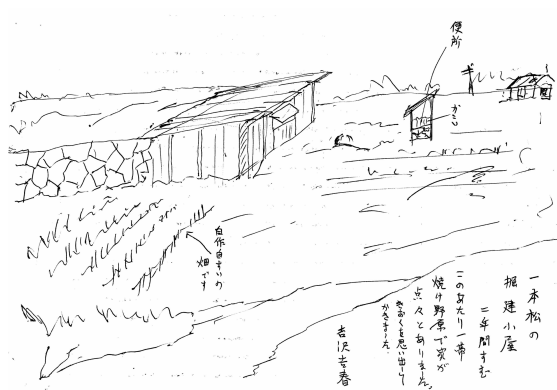
帰国した吉沢さんは元の職場の古河電線に務め、一九四五年五月二九日の横浜大空襲に遭遇した。自宅が焼失した吉沢さんは、知人宅などを頼つた後、知り合いから西区西戸部町一本松の小屋(バラック)を譲り受け、二年間暮らしたという。その小屋の様子を、自らスケッチに描いている(一本松の小屋に関する体験記・スケッチともに『横浜の空襲と戦災』未掲載)。

日中戦争が始まって以降に徴兵検査を受けた若者も、以前なら召集されなかつた層まで出征したことが、吉沢さんの例からよくわかる。もう一人軍隊手牒を残している高山始さん(旭

のみが記されている。一九三一年の徴兵検査では、第二国民兵に編入されており、おそらく丙種合格であつたと思われる。この場合、原則的には入営も召集もなく、第二国民兵として簡閲点呼と国民兵軍事教育が課された。

一九四三年三月付の横浜連隊区司令官宛の寄留地簡閲点呼参会願が残されており、横浜で簡閲点呼を受けていたことがわかる。また、在郷軍人会横浜支部からの軍事教育修了証書が一九四二年・四三年の二年分残っている。一九四二年分には、五月から六月にかけて四回の軍事教育が戸部国民学校で行われたことが記されている。このように、当時の成人男子は、誰もが兵役・軍事とは無縁でいられたのであつたのである。

なお、横浜連隊区司令部は、一九四一年に開設され、神奈川県内の徴兵事務を取り扱つた。実戦部隊の連隊などが、駐屯していたわけではない。



スケッチ 一本松の掘立小屋 横浜の空襲と戦災関連資料  
(吉沢吉春氏提供)

### 総動員体制と地域

以上、四人の例を見て、一九三七年七月の日中戦争開戦以降、徴兵検査甲・乙合格の予備役・後備役だけでなく、高年齢の補充兵役まで召集されるようになり、さらに一九四一年一二月の太平洋戦争開戦と戦況のひっ迫により、根こそぎ動員されるという状況になつていったことがうかがえる。

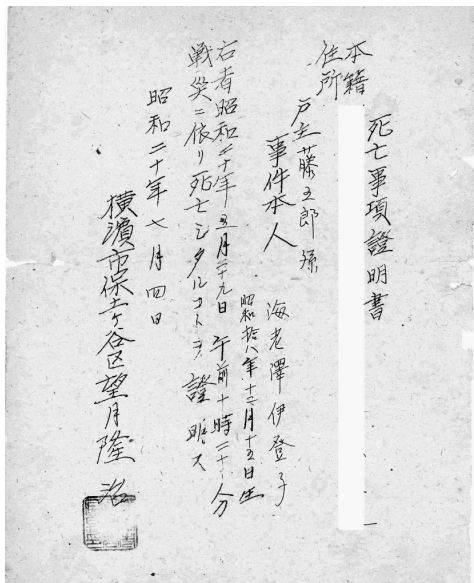
そして、戦時だけでなく普段から兵役と地域の暮らしが、在郷軍人会や防護団・警防団などを通じて密接につながっていたことが、これらの資料からよくわかる。これに加えて、日中戦争後の総動員体制は、たとえば町内会・隣組、さらに国防婦人会や愛国婦人会などの組織を通じて、兵役に就かない女性や子どもまで戦時体制に組み込んでいった。

日中戦争から太平洋戦争の期間に残された写真には、防空演習や出征、英霊の帰還など、いずれも戦争と町内会・隣組や国防婦人会・愛国婦人会の関わりを示すものが多い。戦場の実態を直接表しているわけではないが、戦時体制下の地域の暮らしを示すこれらの写真に、むしろ戦争の本質が表われているのではないだろうか。

空襲と戦災関連資料以外にも、市民から提供された家族のアルバムには、出征し、傷病兵として軍病院に入院した兵士の写真や、空襲で亡くなった女性など、戦争に関わる写真が必ずといってよいほど含まれている。こうした写真からは、家族一人一人の戦争との関わりが浮かび上がってくる。

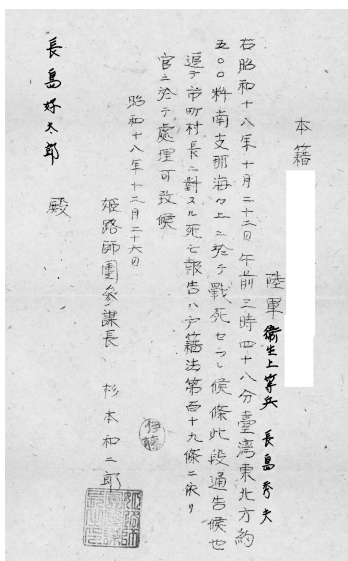
戦争と家族との関わりを直接表す資料としては、軍事郵便が最も象徴的であろう。空襲と戦災関連資料にもいくつか軍事郵便があるが、なかでも満州ハルビンから送られた海老沢一郎さんの軍事郵便は印象的である。軍事郵便であるため消印がなく、年月日はわからない。

姉である平本きぬゑ宛の葉書・書簡が三通、父海老沢藤五郎宛の葉書が一通寄贈されている。いずれも宛先の住所は、保土ヶ谷区星川町である。父宛の葉書では、「空襲も愈々本格的になつた様ですが、割合横浜は平穏ですね、然し油断せぬ様願います」と書かれている。文面から、時期は一九四五年の二月から三月頃が推定される。

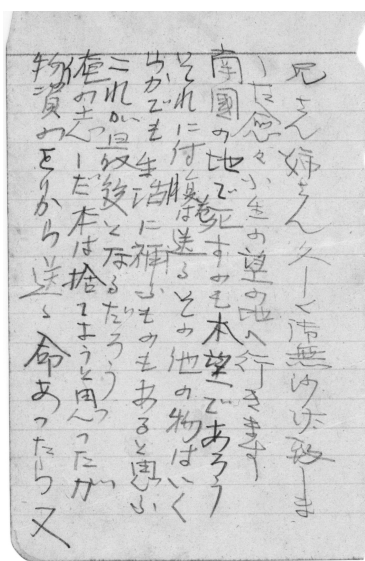


死亡事項証明書 1945 (昭和20) 年7月4日  
横浜の空襲と戦災関連資料 (海老沢絹輝氏提供)

秀夫さんは、衛生兵だった。しかし、この年九月、秀夫さんは南方への移動を命じられた。鉛筆で走り書きの手紙が残されている。軍事郵便の



戦死通知 1943 (昭和18) 年  
12月26日 伊東政子家資料



最後の手紙 1943 (昭和18) 年  
9月17日 伊東政子家資料

以上のように、一人一人の兵士の軍歴や経験は様々である。また、家族との関わりようもそれぞれである。ただ、いずれも戦争に関わっていかざるを得ない状況は同じであった。そのような時代に生きた人々の記録を、一つ一つ大切に伝えていきたい。

(羽田博昭)

横浜はその後、四月一五日に鶴見空襲、五月二九日に横浜大空襲で大きな被害を出す。海老沢さんの家族は五月二九日の空襲で父を除く母ふさ、妻元子、娘伊登子が亡くなっている。三人の死亡事項証明書が、軍事郵便と共に寄贈されている。戦地からの心配が、現実となったわけである。この例だけでも、戦地と家族を結ぶ戦争の現実がよく伝わってくる。

### 戦死した兵士からの手紙

最後に、戦死した兵士の軍事郵便と資料を紹介したい。長島秀夫さんが、保土ヶ谷区天王町に住む兄好太郎に送った葉書などが、その兄の家に残されていた。好太郎さんの娘である伊東政子さんから、当資料室に寄贈された。

秀夫さんは、一九四二年一月頃に黒の東部第一七部隊に入営した。この部隊名は通称で、近衛輜重兵連隊のことである。秀夫さんは翌年三月頃、栄

第一六四四部隊に配属されて戦地に向かった。

目黒からの葉書が二通、戦地からの葉書が三通残されている。国内からの葉書は、検閲はされているが通常の郵便として送られているため、消印から年月日がわかる。無事入営した旨を知らせる葉書は一月二三日付、翌一九四三年二月一八日消印の葉書では次の日曜日にぜひ面会に来てもらいたい、至急の話があると記している。中支派遣軍として戦地に行つて最初の葉書が三月八日付なので、戦地へ向かう前に面会したいということだったのだろう。その後、中国の戦地からは四月と六月の葉書が残されている。

三月の葉書には、「遙か南京より」とあり、内地よりしたいへん暖かいと書いている。栄第一六四四部隊は防疫給水部隊で、南京中央病院に本部があったようだ。

封筒の表に「兄さんへ 姉さんへ」、裏には「九月一七日記ス 秀夫様」とある。

手紙の本文は、手帳の切れ端一枚の表に兄と姉に宛て、「愈々小生の望の地へ行きます 南國の地で死すのも本望であろう」と記し、腹巻や生活品、本などを送る、「これが最後となるだろう 俺の志しだ」、「命あったら又」と、死を覚悟しての遺書のような内容となつている。裏には「雄々しくも立往き空は南風 希み消入る我き(ママ) 血潮かな」と、辞世の歌を残している。「○○地にて託ス」とあるので、荷物と共に出発前に預けて送り届けて

もらったものだろう。やがて年末に、兄の元に戦死通知が届く。差出人は第七三八一部隊で、保土ヶ谷区天王町の兄好太郎宛となつている。「軍事郵便 公用 書留 航空」のスタンプが押してある。内容は、姫路師団参謀長名で、衛生上等兵長島秀夫が一〇月二二日に台湾東北方約五〇〇キロの南シナ海上で戦死した旨を通告するものだった。南方に向かうため乗船した輸送船が、攻撃を受けたものと思われる。

南方への移動の経緯や第七三八一部隊について、なぜ姫路師団からの通知なのか、いずれも今のところ詳細は不明である。栄第一六四四部隊が南方に転進したという記録はないので、おそらく配属先が変更されたのだろうと推測される。翌一九四四年六月には、原隊である東部第一七部隊から、恩賜金が下賜されるという通知が届いている。さらに、戦後になって、一九四五年一〇月二日に遺骨が帰り、五日に合同慰霊祭を開催する旨の通知が、兄弟の実家があった埼玉県本畠村から送られてきた。